

| | |
|-------------|--|
| 開催地名：滋賀県湖南市 | |
| 開催日時 | 令和2年2月16日（日） 9：30～11：00 |
| 開催場所 | 湖南市共同福祉施設（サンライフ甲西）2階大ホール |
| 語り部 | 大内 幸子（宮城県仙台市） |
| 参加者 | 湖南市在住防災士 約60名 |
| 開催経緯 | <p>湖南市では、自主防災組織および防災士の育成に継続的に力を注いでおり、今年度中に防災士会（仮）を設立すべく事業を推進している。しかしながら、地域間で防災への関心に大きな格差があり、自主防災組織に属する者を除く一般の住民にまで防災意識は浸透していないと考えられる。市内でも震度6強の揺れが想定される南海トラフ地震の発生に備え、防災意識の醸成が喫緊の課題となっている。</p> |
| 内容 | <p>（1）震災当日</p> <p>2011年3月11日2時46分に地震が発生した。震度6強であったが、防災訓練で震度7の起震車に乗ったときよりも激しい揺れに感じた。もう私たちはこのまま、おそらく日本全体が沈没していくのではないかと、私たちの命はなくなるだろうと思いつつ、この5分間を耐えていた。日頃から訓練をしていた私たちは、まず重要支援者の安否確認に走り、それから被害状況の確認、避難誘導を実施した。私は高砂小学校という指定避難所に駆けつけ、暗くなる前に、炊き出しの準備や災害対策本部の立ち上げを行った。</p> <p>仙台駅の構内も、地震により被害が発生し、電車を利用し、帰宅しようとした人々が駅構内から締め出されていた。そのため、仙台駅の近くの小学校等は、その帰宅困難者であふれてしまい、地域の人たちが避難することになっている避難所から、地域の人たちが押し出されてしまった。</p> <p>（2）震災で感じたこと</p> <p>仙台市福住町は、全国に先駆けて「福住町方式」と呼ばれる自主防災活動に取り組み、東日本大震災の際も有効に機能させた。重要支援者の住民の名簿作成を行っていたこと、全員参加型の防災訓練を行っていたこと、そして災害時相互協力協定を結んでいたこと、これらが全て大いに役に立った。とてもありがたかったことは、3日分備蓄していた食料が大体底をついてきて、これはもう足りなくなってしまうだろうというときに、災害時相互協力協定を結んでいた山形県尾花沢市や新潟県小千谷市等、いろいろなところから直接福住町に、トラックで支援物資が続々と届いたことである。しかし、私たちの町は、家は壊れたが、津波の被害はなかったので、支援していただいた相手先の方に承諾を得て、支援物資</p> |

の1割は受け取り、残りの9割は岩手県と宮城県の太平洋側の津波被害を受けた地域に届けた。

また、災害時には女性の視点にたった防災、減災が必要だと強く感じた。阪神淡路大震災のときにも言われていたが、避難してくる住民の8割が、いわゆる災害弱者と言われる高齢者、障害者、妊婦、子どもたちである。男性だけで運営するよりも、女性のリーダーがいることで、より細かいところまで行き届いた対応が可能となる。

(3) 教訓として

お祭りやイベント等を通じ、顔の見える関係が減災につながると再認識した。諦めないで、とにかく顔が見えるように努力をしていく。それがいつしか減災につながっていくということは間違いない。地域の災害リスクの理解と共有が、安心安全なまち作りに役立つと言える。自分の住んでいるところがどういうところか、30年前、40年前は災害があったのか。それらを知ること、知ってる先輩方に教えを乞い、自分が知ったら、今度は子どもたちに教えていくことが大切である。

また、備えや準備、取組をしていることは、災害時のリスク削減につながるということも間違いない。普段から準備や訓練をしていないと、非常時に何もできない。できるだけ行政に頼らない地域力も必要である。災害の規模が大きければ大きいほど公助は来ない（来ることができない）。その間に地域のみんなが助け合って頑張る。それが災害時には必要になると思う。日常の取組と訓練が、災害時に力を発揮するというのを常に意識して、各地域で防災活動に取り組んでほしい。



開催地より

地域での災害に対する準備について、その重要性や具体的な方法等、わかりやすくお話いただいた。今後の防災活動の参考になる貴重なお話だった。